



レビー小体型認知症サポートネットワーク福岡 第 13 回研修会・交流会



2018年12月20日（木）にクリスマスのイルミネーションが輝く天神・BiVi福岡で、協力医 合馬慎二先生の司会のもと、DLBSN福岡の第13回研修会・交流会を開催しました。顧問医の坪井義夫先生のレクチャーと、エンディングノートの講演会、グループワークを行いました。27名の参加があり、このうち初参加が8名で当事者の方が2名参加されました。佐賀県からも参加されていました。

レクチャー「レビー小体型認知症について」

顧問医である坪井先生から、レビー小体型認知症の診断、特に診断されるまでの経緯についてお話しがありました。ある調査では、レビー小体型認知症と診断されるまで3人以上の医師が診察を行ったことが報告されています。8割の方が、最初は違う病気と診断されていました。また、診断が確定するまでに、症状が出現してから6.6±4年もかかったという報告があります。このように、診断が難しいのがレビー小体型認知症の特徴です。

レビー小体型認知症の活動量についてもお話しがありました。活動量が低下しやすいので、活動性を上げるために、リハビリや、時には薬剤を使って体力を維持することも必要だとお話しされました。

特別講演「エンディングノートを書いてみよう」～自分らしく生きるために～

福岡大学医学部看護学科の坂梨より、エンディングノートについて講演を行いました。近年「終活」という言葉を良く聞かれると思います。終活とは、終焉活動・終末活動の略ですが、「人生の終焉を考えることを通じて、自分をみつめ、今をよりよく自分らしく生きる活動のこと」と説明されます。終活というと、年を重ねてから行うこととイメージしがちですが、いつ何が起こるかわからない時代。年齢は関係なく、いつ始めてもいいのではないかと思います。また、ご病気を抱えていたり、ご家族がご病気で介護やケアが必要だったりすると、そのこと

に集中してしまい、今をよりよく自分らしく生きることを忘れてしまったり、後回しにしてしまったりしていませんか？エンディングノートは、そんな自分の「今とこれから」を見つめる一つの方法かもしれません。

講演では、まず日本の社会背景から、なぜ、今「終活」が必要かをお話ししました。そしてエンディングノートの概要について触れ、実際にエンディングノートを手にとってもらって、書き方のポイントをお話ししました。このエンディングノートを通して、みなさんの「これから」に繋がればと思っています。

グループワーク

顧問医の坪井先生、協力医の合馬先生の2つのグループに分かれ、椅子を囲んでディスカッションを行いました。その一部をご紹介します。

- ・当事者からのアドバイスが役に立った。
- ・幻視、妄想についてのご相談が多かったが、お互いにヒントを出し合えたのではないかな。
- ・嚥下が進まないというご相談があり、口腔内のケアについて話し合った。
- ・告知について、本人にとってどうかという視点で話し合った。認知症の場合は、告知をすることで「車の運転を止めましょう」と言いやすかったり、職場に働き方を言いやすかったりするのではないかな。ただし、年齢、性格、家族のサポートを考慮していく必要があるな。

次回は、当事者の方から「病を得た今の私」について講演を行って頂きます。

次回の研修会・交流会は、2019年3月14日（木）18時～です。



報告者：DLBSN 福岡 副代表坂梨左織